平成 27 年 11 月 21 日
北関東フォーラム
於：シムックス

中斎塾　北関東フォーラム
平成 27 年度第 10 回

おかげさまで『陽明学のすすめⅥ―三島中洲・二松学舎創立者』が出来ました。11 月 23 日の金鶏神社社稷祭の日に合わせて出版する運びとなりました。刷り上がったばかりの見本が届きましたので回覧致します。それから本日ご紹介する本『論語と算盤』も回覧致します。渋澤栄一さんが「論語と算盤」を主張していたのは御存知と思いますが、同じ『論語と算盤』というタイトルをつけた本 3 冊持参しました。

猪瀬理事長の挨拶の中で、「自分で自分の未来を区切ってはいけません」という話がありました。論語で言えば「今、汝は画れり」です。自分で私の人生はここらへんだと区切ってしまう、これはやめましょう。

年末近くになりました。＜来年は是非これをやりたい＞　という目標を皆さんはお持ちですか？　これをやりたいと思うものがないと、何となく時が過ぎてしまって氣が付いたらお正月になっていた…というのでは楽しくありませんね。今朝のニュースで北の湖理事長の急死が報じられていましたが、人生いつ終わるか分かりませんから、やりたいなと思う氣持ちを常に持って挑戦しなければいけないと感じます。

付け加えると、前回もお話したように、＜憧れの人がいるかいないか＞。更に、自分がこの世に生まれて来て何をしなければならないかを、どこかでピンとこないと人生は楽しくない。そう感じます。

道徳経済合一説

今日のテーマは「道徳経済合一説」です。道徳経済合一説をお話するのに、渋澤栄一と三島中洲を並べてお話した方が分かりやすいと思います。二人を比べてみると、とてもよく似ている所と大分違うところがありますので、それを対比しながら申し上げます。但し、私はなるべく世間話をするようなスタイルでお話ししたいと思っています。

渋澤栄一と三島中洲に共通している点は結構ありました。まず、二人とも長生きです。三島中洲は数え 90 歳、渋澤栄一は数え 92 歳です。しかも亡くなるまで頭がしっかりしていましたから、ピンピンコロリで亡くなっています。

ちなみに、三島中洲は65歳の時に脳出血で倒れました。その後、自分を律する言葉を書いています。「長眠少食・多動寡思・更遠閨閤・老後良規」（長く眠って、少し食べる。沢山散歩をして、くよくよ考えない。女性とは寝室を共にしない。歳をとったら、自分なりのルールをきちんと守る）という自戒です。大きな病氣をした後に、すぐに生活スタイルを変えて摂生をしていったので長生きが出来たのでしょう。

渋澤栄一も65歳で大病を患い、その後は徐々に実業界から引退しましたので、生活のリズムを作ってずっと動いています。朝は 6 時頃に起きて朝ごはんを食べ、手紙を読んだり書いたりして、7 時から 7 時半位には来客の対応をし、午前中には馬車で出かける。夜は、10 時から 11 時位には寝るという生活パターンを続けました。やはり、年をとったら一定のリズムで動いていくのが良いのだろうと思います。

それから二人の共通点は、これからあれをやりたい・これをやりたいという具合に、やりたい事が沢山あったという点です。何故、こういう人生が送れたのか考えてみると、二人とも小さい頃からとても負けん氣が強かった。しかし三島中洲はひ弱でしたから、近所の子供達と喧嘩をしても勝てないわけです。見返してやろうと思って、お爺さんに聞いた通り、井戸で水を浴び、木剣を振ってお祈りをする。３年間、毎日そういう生活をしていました。逆に、渋澤栄一はやんちゃで育ったといえます。小さい頃のスタートで、その後の人生が大分変わってきますね。

年代を追って二人の比較をしてみましょう。

まず、少年時代はどうだったか。どちらも四書五経を覚えさせられて、勉強を一所懸命していました。渋澤栄一は7歳の時に従兄弟から教わっていますし、中洲は14歳で山田方谷に弟子入りをして教わっています。渋澤栄一の方が早熟ですね。実際、渋澤栄一は18歳で結婚していますし、三島中洲は30歳です。いずれにしても「吾、十有五にして学に志す」の通りです。

青年時代はどうだったでしょうか。論語の「吾、十有五にして学に志す。三十にして立つ・・・」には、20 代は書いてありません。私は、20 代は好き勝手なことをしてもよい、世間に迷惑をかけても許される年代だと解釈しています。

渋澤栄一は23歳の時、高崎城の焼き討ちを計画し、横浜の夷狄を殺しに行こうと決心をして、親の金をくすねて百人分の刀や槍をかき集め、「明日に道を聞かば、夕べに死すとも可なり」を唱えながら、いざ決行というところまでいきました。寸前で計画は中止になり、幕府に追われて京都へ逃げ、親にも諦められています。

三島中洲は23歳の時、津藩の斎藤拙堂の所へ勉強に行っています。ひたすら学問に打ち込む、まともな道を歩んでいます。そして28歳の時には、備中松山藩で山田方谷の片腕と

なって藩政に携わっています。

ひ弱な少年だった三島中洲は 20 代で本の虫となり、並ぶ者がないくらい学問に抜きん出ることになりました。一方の渋澤栄一は 20 代で焼き討ちを計画し、幕府に追われる。朱子学型と陽明学型という分かれ方になっています。

二人の世に出るきっかけは何だったかを考えると、渋澤栄一は 24 歳で一橋家に仕官しました。三島中洲は 28 歳で備中松山藩に仕官をしました。どちらも滅茶苦茶に働いています。20 代を必死になって動くと、だいたい人脈の根が出来てきます。皆さんもそうではありませんか？　一生涯の友達はいつでもできると思うでしょうが、20 代の頃の友人は結構長く続くことが多いように感じます。20 代は色々と問題を起こすけれども、先々に伸びる種が出来てきます。

渋澤栄一にも三島中洲にも引っ張ってくれる人がいました。目上が引っ張り上げてくれ、同世代の人間が押し上げてくれ、目下の人が持ち上げてくれる。この三つが揃っていないとなかなか世に出られませんし、世に出た後も広がっていきません。その原理原則通りに、三島中洲も渋澤栄一も進んでいきました。

お金の面を見てみますと、二人ともお金持ちになりました。渋澤栄一は「日本資本主義の父」と云われるほどの大実業家です。生涯で五百余の日本の基幹産業となるような企業を設立し、実業界を引退した後は六百余の社会事業に関与しました。渋澤栄一がいなければ、日本の資本主義は相当遅れただろうと云われています。ただ面白いことに、渋澤栄一は自分でどんどん稼ごうと思って稼いではいません。本人曰く、「私は儲けようと思って株券を買った事は一度もない。誰も引き取らなくなった株券を、世の中のためになる仕事だと思って引き受けて、会社を立て直し、結果としてその株が財産になった」というわけです。渋澤栄一の考えは、金は天下の回りもので、自分から追いかけなくても入って来る。入ったら、どんどん出す。そのくり返しで生涯を送りましたから、亡くなった後、財産はそれほど残っていませんでした。ですからお金に縁は凄くあったけれども、お金を残さなかった、そういう生涯です。

三島中洲は学者です。自分では無欲恬淡としてお金はそれほど要らないと言っていますが、結構稼いでいます。三島中洲が創った漢学塾（二松学舎）の年間の授業料は 1395 円でした。その当時、麹町にあった 35 の漢学塾の平均 143 円ですから、ほぼ 10 倍。当時の金銭感覚がわかるように申しますと、三島中洲は裁判官になって新治裁判所の所長にまで出世しましたが、明治政府の政策のもと今で言うリストラをされてしまったわけです。その時の退職金が 200 円。その 200 円で二松学舎の建物（小学舎）を造りました。建物 1 棟が 200

円ですから、その時代に年間授業料 1395 円とっていたわけですから結構な金額です。

他にも中洲は碑文を書いていますから、その収入もありました。渋澤栄一も奥さんが亡くなった時、中洲に碑文を書いてもらっています。碑文の金額については、公の資料は残っていません。おそらく相手によって金額をつけたのではないかと思います。100 文字 10 円としても、相当な収入になったと思います。稼いだお金で、息子をアメリカの大学に行かせたり、引退してから３人の息子にそれぞれ１万円ずつ譲渡したりしています。他に、お妾さんもいましたし、５人の養女（漢詩では５人ですが、実際は８人とも云われます）を養って嫁に出しています。自分では「お金は要らない。無欲恬淡としている」と書いていますが、どこでそんなお金を作ったのかと思います。

日本の歴史物でも自分の事を書いている記録・自伝の類は、眉に唾をつけて読むべきで、事実と違うことが多く書かれていると思ってよいでしょう。

「道徳経済合一説」は、もともとは「義利合一説」です。義利合一説を発展させて道徳経済合一説という言い方に変えました。義利合一説とは、中洲曰く「義に臨んで一歩を進め、利に臨んで一歩を退く」です。今風に言えば、人間が生きていく上において道徳は絶対に必要です。世のため人のためを掲げなければならないけれども、そうするには先ず自分の利益・私欲を先に満たさなければなかなか出来るものではない、ということです。言っていることと大分違いますが、ご飯が食べたい・良いものを着たい・遊びたい…そういう欲求をまずやりなさい。それがほどほどに満たされたなら、世のため人のためになることをやりなさい、それが「道徳経済合一説」だと説明しています。

中洲はもっと高尚な言い方をしていますが、中身を全部はがしてみれば、そういうことです。世のため人のために事をなせば、結果として自分の利益にもなる。これが「道徳経済合一説」の表面的な説明です。本音は、先に自分のことをやりなさい。お腹が減っていたら人のことは助けられない、ということです。但し、貪らないという条件はあります。ほどほどで自分自身が満足したなら世の中の人のために働く、というのが「道徳経済合一説」だと言っています。

恒例の質問

では、恒例の質問を致します。夕べ寝る時、今日はどんな一日だったか思い出して寝た方はおられますか？　今日一日を振り返って寝た方は、質問にすぐ手が挙がります。

○　昨日一日、良い日だったと思う方

具体的に良いイメージが浮かぶとよろしいですね。私の場合、一日の中で何かとても嬉

しい事があった時に、＜今、この瞬間を寝る時に思いだそう＞と心に刻むようにします。そうすると、夜寝る時にそのイメージがふっと思い出せます。

○　昨日一日、嘘をつかなかった方

嘘をつかないで一日を過ごせると、翌朝も爽やかです。嘘を一つつくと、心にちょっとゴミが残ります。リップサービスもあるし、心ならずも嘘をついてしまう事もあるでしょう。しかし心ならずも嘘をつくと、何となく寝つきが悪いものです。なるべく嘘をつかないように努力をしましょう。

○　昨日一日、有難うと言い、有難うと言われた方

有難うと言われたのと言われないのでは、心の落ち着きが違います。今日は有難うと言われていないと思ったなら、奥さんにお茶でも入れてあげるとか、家族に何かサービスをして有難うと言ってくれるように仕向けるのです。

○　昨日、健康法を実践した方

床に入ってから健康法を実践していないと思ったなら、足を真っ直ぐに延ばして、つま先を上に向けてふくらはぎをぐっと伸ばしたり、緩めたりして下さい。それだけでも健康法を実践したことになります。

○　昨晩寝る時に、明日以降を過去形でイメージして寝た方

○　昨日一日、自分磨きをした方

方法は何でも結構です。是非、自分磨きをされるとよろしいでしょう。

論語解説

本日の論語は憲問篇 12～14 です。

【一二】子曰く、孟公綽は、趙　魏の老と為さば則ち優ならん。以て滕　薛の大夫と為すべからず。

孔子が言うには、孟公綽は、滕や薛のような大国の家老ならば十分に力を発揮できる。しかし滕や薛のような小さな国の政治家には向いていない。

孟公綽は孔子より一時代前の魯の国の政治家で、非常に欲が少ない人物です。人柄は良いのですが、才能はいまひとつなので、孔子はこう評価をしています。

今風に言えば、孟公綽は人材が沢山いるような大きな会社の専務ならば、ゆったり構えて指示するだけで済むから、その会社は順調に伸びていくだろうし、孟公綽も優秀だと言われることだ。しかし中小企業の専務は何から何まで自分でやらなければならないから、

孟公綽には無理である。

自分は大企業の専務型か中小企業の専務型か、自分自身に置き換えて考えると、自分の人生行路はこれでよいのか判断基準になります。

【一三】子路 成人を問う。子曰く、臧武仲の知、公綽の不欲、卞荘子の勇、冉求の藝の若くして、之を文るに礼楽を以てせば、亦以て成人と為すべし。曰く、今の成人は、何ぞ必ずしも然らん。利を見ては義を思い、危を見ては命を授け、久要に平生の言を忘れざるは、亦以て成人と為すべしと。

成人とは、完璧な人格者です。

子路が「完璧な人格者とはどんな人でしょうか」と聞きました。

孔子が答えました。「臧武仲のように知恵があり、公綽のように無欲で、卞荘子のように勇気があり、冉求のように才能にあふれている。更に礼楽の教養を加えれば完璧な人格者だと言えるだろう。」

更に孔子が言いました。「今の人格者と言われる人たちは、私の考えている完全無欠な人格者とは違うようだ。目先の欲につられず、義にあっているかを考えて世のため人のためを思って行動する。人の危険を見たら命を懸けて助ける。昔の約束を忘れずに実行する。こういう人物であれば完璧な人格者と言えるだろう。」

子路は、孔子から見ると非常に可愛い弟子で、愚痴をこぼしたり漫才問答をしたり、子路を怒ることによって周りの弟子を励ますといった対応をしています。ですからここは、言外に「子路や、お前はまだまだ遠いねぇ。どれか一つを一所懸命やりなさい」という子路への氣持ちが含まれています。

孔子は子路に対して、勇気はあるが智恵が足りない、愛すべき人物だけれども畳の上では死ねないだろうと言っており、孔子の予言通り、子路は戦で殺されて肉を切り刻まれて膾にされてしまいました。それを知った孔子は、自分の家にある膾の入った甕を割ったという話があります。そういう人間関係をイメージして読んでください。

【一四】子 公叔文子を公明賈に問いて曰く、信なるか、夫子の言わず笑わず取らざることはと。公明賈 対えて曰く、以て告ぐる者の過てるなり。夫子は時ありて然る後に言う。人　其の言うことを厭わず。楽しみて然る後に笑う。人　其の笑うことを厭わず。義ありて然る後に取る。人　其の取ることを厭わずと。子曰く、其れ然り、豈其れ然らんやと。

公叔文子という人は衛の大臣で、大金持ちだったそうです。当時あだ名が、不言・不笑・不取と付いていましたから、孔子は本当かと思い、衛の公明賈に聞いています。

孔子が、公明賈に公叔文子はどういう人物かと聞きました。「あの人は言わず、笑わず、取らざるだというのは本当かね。」

公明賈が答えました。「それは言った人が間違えています。あの方は言うべき時には言います。言うべき時に言うだけだから、普段言わなくても誰も氣にしないし、聞く人は嫌がらないで聞きます。また、皆が笑うような時には自然と笑顔になるので、周りの人は氣にもしません。大義名分があれば、一時を置いてきちんと受け取っている。だから周りの人はそれを氣にもしないし、氣がつかない場合が多いのです。」

孔子が「そうか、しかし本当にそうだろうか」と、半信半疑で答えました。

「義ありて然る後に取る」という部分で考えますと、今の日本の税金はけしからんですね。国が疲弊してきた時には、減税をすることが政治家のすべきことです。くれぐれも増税など考えてはいけないことは歴史が証明しています。年金を貰っている人が一所懸命働いてお金を稼ごうと思うと、その分の年金がカットされます。だから働き方をセーブしなければいけない。生活保護を受けている人も同じで、働いた分がカットされます。働くな、働くな、というのが日本の税制です。

今の政治家は何と劣悪になったかと私は思っています。政治家は、江戸時代で言えば士・農・工・商の士です。その士が一番悪い。ここまで政治家のレベルが下がると、日本の国は沈没するしかないという氣がします。中身が空々しくて、定型化しています。世のため人のためと口では言うけれど、皆、自分のためではないかと思えてしようがありません。もっと政治家のレベルが上がれば、日本の国は見違えるように良くなると思います。

干支学から来年を考える

平成 28 年の干支は丙申（へいしん・ひのえさる）です。毎年、季刊誌「知足」に干支の話を書いていますが、今年の 1 月号に何を書いたか覚えておられますか？　「アベノミクスが一見順調で、景氣も良さそうに見えるけれども、実際は物価も上がり、収入はそれほど上がらないから、国民は良くなったという実感はない。また、一触即発という言葉で、北朝鮮や韓国、ロシアと言った国々が日本と戦端を開く危険性があるし、自然災害の脅威が去ったわけではない。危険なことが沢山起きるから要注意だと書きました。国民は自給自足を始めましょう」・・・といった内容でした。

それを踏まえて、来年のことを申し上げます。

丙の年は良い年だと言われます。安岡正篤先生、白川静先生、加藤常賢先生、諸橋轍次先生の解説を見ますと、だいたい同じことを言われています。丙は「冂（かこい)」、門を表しています。門の中に陽氣がどんどん湧いて持ち上がって来るから、すごく良い年になると見えます。加藤常賢先生は、門の上の犠牲者の首を人間が押している姿だという説明をしておられます。私はその翳りをとって、人間の勢いがぐっと伸びていって最高に達した時には、必ずどこかで翳りが生まれているという解釈をしました。

申は「伸」です。どんどん伸びていく。どの先生方も「稲妻」であるという解釈をしています。稲妻だから、鋭くえぐれる。

ですから字の形から推して、来年はとても良い年になるけれども、心を突き刺すようなえぐられる稲光が発生して、とんでもないことが起き、心臓を貫くような危険性が増えてくる。そういう年だと思います。一見良さそうですが、中身は大変です。

今風に解釈すれば、来年はアベノミクスの新三本の矢が放たれ、首相が外国にせっせと回って外交交渉をしているし、先頭切って新しい仕事をとって来るし、それを育てる。1億総活躍社会を打ち出すなど、一見とても良いように見えます。メディアが、将来が期待できるともてはやす。そういう年の滑り出しをするでしょう。

しかし、今年の一触即発を上回るような危険性が増大します。なぜならば、戦端を開くと考えられた北朝鮮・韓国・ロシアだけでなく、そこにイスラムが加わった。日本を標的にしてテロを仕掛けるでしょう。偶発的に戦端が開くのではなく、狙い撃ちをして来るでしょう。ですから危険性の増大は、「申」の鋭く急所をえぐるような稲妻が来るから、もしかすると自分の所属している団体や会社の弱点を鋭くえぐるような問題が発生する。日本の国の急所をえぐるような問題が発生すると考えられます。世界全体の感覚で見れば、来年は世界同時不況、大恐慌のようなものが起こる可能性が今年よりはるかに増えています。

ですから出だしだけは良さそうだともてはやされるけれど、数か月で電光稲光が起きたならば、安倍内閣は即座に総退陣せねばならないでしょう。そうすると次の総理大臣が出てくることになりますが、その舵取りが悪いと日本という国は一氣に奈落の底に落ちて行くことになります。電光稲光がそういう所までいかなければ、「丙」の陽氣が立ち上っている中に翳りが見えて、冷や冷やの連続、薄氷を踏む思いで 1 年間を過ごすことになるでしょう。

私は、平成 25 年から 5 年間は黎明の時期と言っていました。黎明の時期ですから、奈落の底に突き落とされない。したがって稲光に突き刺される危険性があるけれども、結果としては冷や冷やの連続で何とか生きていく年回りだと思っています。

新聞の嘘

残りの時間で時事評論を申します。新聞の見方は何度も申しますが、民主党が政権をとった時には、民主党の打つ無様な手を見て下さいと申しました。今は、自公政権の打つ手を是々非々で見て下さい。二番目が国債の動向。三番目は自然災害を見て下さい。

そういう視点で見ると、11 月 13 日の読売新聞の記事に「介護の受け皿 6 万人上積み　離職ゼロ推進」という記事がありました。よくもこういう嘘がつけると思います。メディアの出し方も問題ですね。前回も新聞は話半分で見て下さいと申しましたが、明らかな嘘をついている記事が最近増えています。新聞を読む時に、嘘か嘘でないかを意識して見て下さい。

別の記事に、「介護職員の給料を一人当たり月 12,000 円の賃上げをするように補償制度を作った」とあります。ところが政府の補助金制度というのは曲者で、政府が出すお金は少なくしたい、けれどもそれには問題があるから、色々な条件をつけて全ての条件をクリアしたなら補助金を出すという仕組みを作った。全体的に補助金を出す額は減らすけれども、その中で特別優秀な会社には一人当たり 12,000 円の補助を出せるようにした、というわけです。新聞が書くのは、この一部分だけ意識して載せている。全体像の解説はしないで、政府が発表したいアドバルーンだけを載せている。

ですから皆さんが新聞を読んで、おや？と思ったなら、調べて下さい。調べると、全体像が見えて、自分自身の判断基準が更に研ぎ澄まされてきます。新聞を見る時に、何処が嘘かと、最近は思うようになりました。

以上で本日の講話を終了致します。有難うございました。